

説教 「主の神殿」

(エレミヤ書 7 章 1-7 節 使徒言行録 19 章 13-20 節)

2021 年 7 月 11 日 主日礼拝

日本基督教団 仙川教会

大串肇牧師

預言者エレミヤがイスラエルに登場したのはおよそ紀元前 7 世紀後半でした。約 40 年間の活動の中で、イスラエル、当時の南王国ユダは結局独立国家としては存続できず、外国の軍隊によって崩壊しました。国家的な破局が訪れる直前、この預言者は活動しました。この時代、イスラエルは比較的安定した時期でした。経済的にも潤っていたと考えられています。それにもかかわらず、人々の心は荒み、不安や恐れに振り回され、偶像礼拝や偽預言にふけていたのです。あのエルサレム神殿も例外ではありませんでした。儀式は形骸化し、社会も道徳的にも退廃していました。そのような最中であって、壮大なエルサレム神殿にはいつも大勢の参拝者たちが集っていました。

そこにエレミヤは登場してこう述べたのです。

主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。(4 節)

わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巢窟と見えるのか。(11 節)

このエレミヤを通して語られた言葉は衝撃的でした。人々は皆激しく反発しました。そしてエレミヤは危うく殺されかけました。詳しい事件の消息は 26 章に記されています。

彼らは、確かに上辺だけは熱心に礼拝はしていました。しかし彼らが信じていたのでは目には見えない神ではなく、目に見える神殿でした。自分たちには立派な神殿がある。だから安全であると信じこんでいたのです。ところが、彼らの生活はとんでもない状況になっていたのです。そのことについて語っているのが 9-10 節です。

盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知る事のなかった異教の神々に従いながら、10 わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか……。

上辺だけは信仰的に装っているけれども、実は彼らの生活は分裂してしまっている。自分の欲望に振り回されて神の戒めを守ろうともせず、神の言葉に耳を傾けもしない。自分勝手な思いを優先させてしまう結果、自分を正当化しようとしていたのです。まさに神殿を「強盗の巣」にしてしまっていたのです。言い換えれば、彼らは神を礼拝しているのではなく、神さえも自分の都合のいい、食べ物にしてしまっていたのです、エレミヤは鋭い洞察力で偽りの信仰を見抜いていました。

このエレミヤの言葉をイエスは引用しました。エルサレム入城した直後、イエスは神殿境内で不正な商売をしていた人々を追い出したとき、神殿を「強盗の巣」にしてしまっていると嘆きました。

これらの言葉は時代を超えて現代のわたしたちの教会にも向けられています。日曜日には祈り、御言葉を聞いていても、毎日の生活が神の教えからかけ離れていることはないでしょうか。実のところ、神がいなくても安心だと思いつ込んではいないだろうか。もしそうならば、都合のいい時だけ神を拝んでいることにはならないだろうか。もしそうであれば、わたしたちは信仰をもっていると主張しても何も変わらないのではないのでしょうか。

エレミヤ書 26 章によれば、エレミヤの神殿説教は大事件になりました。他方、エレミヤは全くの無力でした。預言者に抵抗する人々の方が優勢のように感じます。信仰をもち、正直に神の教えに従って生きることが実に困難な満ちであるか、エレミヤの生涯はそのことを指示しています。しかしながら宣教者としてエレミヤはその使命をやり抜くことが出来ました。それはどうして可能だったのでしょうか。それがエレミヤ書の中心的な使信の一つです。それは、彼が預言者としての召命を受けた時に聞いた神の約束の言葉が彼を支えたからです。

彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて／必ず救い出す(エレ 1:8)。

この約束の言葉に心の耳を傾け、祈りつつ神に従っていくならば必ず道は開けるのです。同じ救済の約束をわたしたちも聞くことが出来るです。この神の愛と赦しの中でこそ、わたしたちは自分勝手な思いから解放され、偶像礼拝の誘惑に打ち勝つ信仰と勇気を神は必ず与えて下さるのです。その約束を信じてわたしたちも信仰生活の歩みをなしてまいりましょう。

お祈りいたします。